

# 第9次南極地域観測隊夏隊報告

1967—1968

清 野 善兵衛\*

## REPORT OF THE SUMMER PARTY OF THE 9TH JAPANESE ANTARCTIC RESEARCH EXPEDITION IN 1967-1968

Zenbei SEINO\*

### *Abstract*

The 9th Japanese Antarctic Research Expedition (1967-1968), consisting of forty members, was led by Mr. Masayoshi MURAYAMA, also leading the wintering party of twenty eight men. The deputy leader (the author) led the summer party of twelve members.

On November 25, 1967, the icebreaker FUJI under command of Rear Admiral Toshiharu HONDA, with forty expedition members and four news reporters, left Tokyo and headed for the Antarctic via Fremantle of Australia. At Fremantle, Mr. M. SPONHOLZ, American meteorologist, got on board the FUJI as an observer.

On December 29, 1967, the FUJI reached the northern part of fast-ice of Lützow-Holm Bay, 40 nautical miles northeast of Syowa Station, and from there the first helicopter flight to the base was made carrying personnel and cargo.

Afterwards the FUJI penetrated the hard

fast-ice to make an approach to the station, and after eight days of great efforts she succeeded to approach the station.

On January 12, 1968 the FUJI reached coastal bay-ice of the Sôya Coast near the station, and unloaded three oversnow vehicles (KD60), sleds and fuels for the scheduled traverse trip to the south pole. Next day the FUJI reached and anchored at the coast of East Ongul Island.

Unloading of about 500 tons cargo and transportation to the station was carried out mainly by two S-61A helicopters, of which nearly 140 tons of heavy materials were transported over ice by oversnow vehicles.

Construction work was carried out throughout the period of anchorage.

A new living hut (wooden, 20m×5m), a new generator hut (metal, 14m×18m) and corridor were almost completed before the ship left.

On January 29, the FUJI moved to the southern part of Lützow-Holm Bay, from

---

\* 気象庁南極事務室. Antarctic Office, Japan Meteorological Agency, Otemachi 1-chome, Chiyoda-ku, Tokyo.

where two research parties were sent out, one for the Lang Hovde area and the other for the Skarvs Nes area. In the Lang Hovde area an underwater research was attempted by SCUBA diving.

On February 1, the FUJI returned to the Syowa and left there on February 3rd, taking the same route to the north, and escaped from fast-ice after three days.

Then, the FUJI sailed to the east and visited Molodezhnaya Station (USSR) on the 8th of February. Next day two field parties were sent by helicopter to the rocky areas of the Prince Olav Coast.

On February 9, several members of the 9th expedition team at Syowa Station found the body of Mr. Shin FUKUSHIMA, who was lost in severe brizzard in October, 1960, on the west coast of West Ongul Island, nearly 4 km southwest from the station. After the Buddhistic cremation was performed, his ashes

were transported to the FUJI by helicopter next day.

On the 11th of February the station was officially turned over to the 9th wintering party, and the FUJI took her departure homeward.

Unfortunately, bad weather prevented the visit to the South African SANAE Base on the 17th of February.

After staying at Cape Town from the 1st to the 7th of March, and at Colombo from the 23rd to the 27th, the FUJI returned to Tokyo on April 12.

Shipboard scientific programmes were successfully carried out throughout the voyage with the following subjects: cosmic rays, VLF studies, radio noise observations, proton magnetometer survey, surface and upper-air meteorological observation, surface-ship gravimeter survey, oceanography, and marine biology.

## 1. 第9次観測隊の任務と編成

### 1.1. 第9次観測隊の任務

第7次観測隊によって1966年昭和基地は再開されたが、これに先立って、1965年南極特別委員会で将来の長期計画を立案し、これにもとづき各部計画専門委員会が具体的実施要領を決定し、各年次観測隊がこの計画に従って運営されている。

第9次越冬隊に与えられた任務は、第8次越冬隊によって実施された昭和基地を中心とする定常・研究観測を継続充実すると共に、特に南極大陸内陸地域をより広く調査することに重点がおかれ、できれば昭和基地・南極点間の長距離往復調査旅行の計画を持っている。

1) 基地においては継続的に行なう定常観測、即ち、極光全天写真観測、地磁気三成分連続測定、同絶対測定、電離層定時観測、地上気象観測、高層気象観測、潮汐観測、自然地震観測、積雪観測等を第8次越冬隊から引続き実施する外に、研究観測として、極光、地磁気、宇宙線、電波科学、気象、雪氷、地質、医学の各部門が、それぞれテーマを持っている。

気象学の雲物理，医学の生理学，細菌学は今回新たに取り上げられたテーマである．

2) 内陸調査は1965年6月南極特別委員会の決定した基本方針に基づき年次計画が示されている．第9次隊は第8次隊の行なった内陸調査地域を拡大，南極点までの調査，雪氷，地学，地磁気，気象，重力等の観測を実施する任務を持つ．このため内陸調査旅行に参加する隊員12名は隊員選考の際すでに内定されていた．

以上の越冬業務を実施するため，越冬隊員は28名となり，更に報道記者1名を加えて29名となったので，居住施設の不足を補うため，新たに居住棟の建設が必要となった．また基地観測の充実改善，特に観測用発電機を独立させるために，新たに65KVAの発電機と新しい発電棟の増新設が必要となった．これに伴い燃料必要量が増加し，物資輸送量は約500tに達した．

一方，夏隊は副隊長以下12名で編成され，往復の船上では海洋観測，海上重力観測，生物観測を実施，特に生物観測に重点がおかれ，基地接岸中，または沿岸航行中機会をとらえて露岩地帯の調査を行なうことになっていた．また基地周辺の開水面において日本観測隊が初めて試みる潜水による海底調査も計画された．

往航船上で越冬隊により海上磁気測定，超高層観測（VLF，中短波電界強度，空電スペクトル，宇宙線），気象（海塩核）の諸観測が行なわれたが，復航はそれらの中，海上磁気，超高層観測は夏隊が担当することにした．

基地建設期間中は夏隊も勿論輸送建設作業に従事しなければならないので，輸送，建築の専門家が夏隊に参加した．

## 1.2. 観測隊の編成および観測計画

隊員の選考については，例年のように，日本学術会議南極特別委員会で推せんされた隊員候補者については東京大学付属病院において身体検査が行なわれ，南極地域観測専門委員会健康判定部会の判定結果により南極地域観測統合推進本部長から委嘱を受ける形式がとられた．

7月1日には隊長，副隊長および隊員の第一回目の発令があり，以後数回に分けて発令された．

3月1日から5日まで隊員候補者は福島県磐梯青年の家を基地として寒冷地訓練を，また7月17日から20日まで長野県菅平高原体育研究場において総合訓練を受けた．

この他10月25日から28日まで富士山麓御殿場にて，内陸調査要員の雪上車その他の内陸調査旅行の訓練，9月14日から16日まで全員が「ふじ」に乗艦，横須賀・大阪間の航海を経験した．観測各部門においても部門毎に観測訓練，機器取扱いの研修を受けた．

本観測隊の隊員選考についての特色は、南極地域観測統合推進本部関係者にオペレーションの実態を経験し、昭和基地の現状を把握してもらうために文部省から事務官の参加を求めたこと、また観測隊物資の集荷、梱包、海上輸送、空輸等一連の物資輸送業務を担当すると共に、今後の観測隊の物資輸送の一方式を定めるために、日本通運株式会社より輸送専門家の参加を求め、それぞれ夏隊員に加えたことである。

昨年に引続き米国よりオブザーバーとして、Martin P. SPONHOLZ（米国気象局、極地微気象専門、1966年プラトー基地にて越冬）がフリーマントルにて乗船、ケープタウンにて下船するまで船上においてカイツーンによる低層気象観測を20回行なった。また、報道記者として高木八太郎（朝日新聞、越冬）、本多光之（共同通信）、加藤慶男（NHK、ケープタウンにて下船）、寺田捨己（東京放送、ケープタウンにて下船）が同行した。

第9次観測隊の編成は次の通りである。

表 1 第9次観測隊編成表

区 分	担 当 部 門	氏 名	所 属
越冬隊	隊 長	村 山 雅 美	国立科学博物館極地研究部
	定 常 観 測	山 崎 道 夫	気 象 庁 観 測 部
		井 部 良 一	〃
		福 谷 博	〃
		石 沢 薫	電 波 研 究 所
		吉 田 光 雄	国 土 地 理 院
	研 究 観 測	田 中 義 人	名古屋大学空電研究所
		須 田 友 重	気象庁気象研究所
		鶴 田 治 雄	文部省大学学術局
		森 岡 昭	〃
		菊 地 勝 弘	北海道大学理学部
		大久保 嘉 明	東京医科歯科大学医学部
		藤 原 健 蔵	広島大学教養学部
		柿 沼 清 一	国 土 地 理 院
		江 頭 庸 夫	京都大学防災研究所
		矢 内 桂 三	文部省大学学術局
		遠 藤 八十一	北海道大学低温科学研究所

(二十八名)	設 営	医 療	小 林 昭 男	文部省大学学術局
			土 屋 貴 俊	〃
			細 谷 昌 之	〃
			山 本 利 一	〃
			関 野 保	〃
		機 械	喜 納 淳	国立科学博物館極地研究部
			西 部 暢 一	文部省大学学術局
			増 田 博	〃
			小 堺 秀 男	〃
			川 崎 巖	〃
夏 隊 (十二名)	設 営	通 信	森 田 博 正	〃
			副 隊 長	清 野 善兵衛
			海 洋	日向野 良 治
			渡 辺 隆 三	海上保安庁水路部
			富 永 裕 之	〃
		定 常・研究観測	柏 谷 博 之	名古屋大学理学部
			福 井 義 夫	広島大学理学部
			長 沢 工	文部省大学学術局
			生 物	東京大学理学部
			地 球 物 理	〃
設 営	設 営 一 般	〃	村 越 望	国立科学博物館極地研究部
			諸 星 秀 勝	文部省大学学術局
			大久保 侃	〃
			福 井 克 己	〃
			石 川 正 弘	〃

## 同行報道記者

越冬：高木八太郎（朝日新聞）

夏隊：本多光之（共同通信），加藤慶男（NHK），寺田捨己（東京放送）

## オペレーションメンバー

(議長) 村 山 雅 美 石 沢 蕉 清 野 善兵衛 土 屋 貴 俊  
 藤 原 健 蔵 渡 辺 隆 三 山 崎 道 夫 村 越 望

## 記録担当者

(越冬隊)

(夏 隊)

公 式 報 告 村 山 雅 美  
 日 誌・記 録 大久保 嘉 明  
 写 真・映 画 村 山 雅 美  
 高 木 八 太 郎

清 野 善兵衛  
 福 井 義 夫  
 村 越 望

観測計画については南極特別委員会決定の年次計画に基づき、その細目については計画専門委員会で決定された。第9次観測隊越冬隊および夏隊の観測項目、テーマ、方法、期間、担当者について表2に示す。

表2 第9次南極地域観測隊観測計画

## 1. 基地観測

部 門	項 目	方 法	期 間	担 当 者
極光・夜光(定)	極光連続観測	全天カメラ, 目視	2月20日～10月20日	吉田
極光・夜光(研)	分光観測	エシエル型, マイネル型	2月20日～10月20日	鶴 田
	光電観測	多色式	〃	〃
	極光微細構造観測	フォトメーター	〃	〃
	極光雑音	70Mc リオメーター	通 年	〃
	極光と地磁気脈動との関連	バリオメーター	通 年	〃
地 磁 気(定)	三成分観測 絶対測定	直視型磁力計 2等磁気儀, マグネットメーター	通 年 10日に1度, 通年	吉 田 〃
地 磁 気(研)	地磁気脈動 V L F 自然電波観測 極光輻射観測	誘導型磁力計 V L F 観測装置 H F 雑音電波観測装置	通 年 〃 〃	森 岡 〃 〃
電 波 科 学(研)	ファラデー効果の測定 E L F, V L F の偏波入射角の観測	人工衛星を利用 偏波入射角観測装置	通 年 〃	田 中 〃
宇 宙 線(研)	宇宙線強度連続観測 低エネルギー宇宙線観測	中性子計 浮遊気球による	通 年 年間8回	須 田 〃
電 離 層(定)	電離層垂直打上観測 短波電界強度測定	電離層観測装置 リオメータ, 電界強度測定装置	15分毎, 通年 通 年	石 沢 〃
電 離 層(研)	V L F 観測 レーダーによるオーロラ観測	V L F 観測装置 オーロラレーダー	〃 〃	〃 石沢, 須田
気 象(定)	地上気象観測 高層気象観測 特殊ゾンデ観測	自動気象観測装置, 同印字装置, 目視 ゾンデ, D55B オゾンゾンデ 放射ゾンデ 露点ゾンデ 電気ゾンデ	通 年 1日1回通年 年間20回 年間50回 年間10回 年間15回	山崎, 井部, 福谷 〃 〃 〃 〃 〃
	放射観測	フック型ネットフラックスメーター	通 年	〃
	オゾン全量観測	ドブソン型二重分光計	冬季を除き年間	〃
	天気解析	南極天気図作成, F A X	通 年	〃

気 象 (研)	氷晶核濃度観測 凝結核濃度観測	氷晶核自記測定装置 活性化式凝結核測定装置	通 年 通 年	菊 地 〃
	雪結晶, 氷晶の顕微鏡的調査	光学顕微鏡, レプリカ, けい留気球	随時, 通年	〃
	降雪および飛雪の電荷測定	真空管電圧計	随時, 通年	〃
	低高度絹雲の写真観測	写真による二点観測	随時, 通年	〃
	降水, 大気塵の試料採集		随時, 通年	〃
	氷晶の電荷の測定 海塩核濃度の測定	平行極板式測定装置 インパクター, 顕微鏡	随時, 通年 毎日, 通年	〃 〃
地 震 (定)	自然地震観測	短周期, 長周期地震計	通 年	吉 田
潮 汐 (定)	潮汐観測	水圧式検潮儀	通 年	吉 田
測 地	基準点測量	ウィルド, エレクトロテープ	夏 季	吉田, 柿沼
雪 氷 (研)	積雪観測	断面観測, 薄片の顕微鏡写真	約10日毎, 通年	遠 藤
地 質 (研)			随 時	矢 内
医 学 (研)	ウィルスの分離, 抗体の消長 Human adaptabilityの研究	人間および南極動物より資料採取 寒冷馴化の調査	月1回または随時, 通年 月1回, 通年	大久保 〃

## 2. 内陸調査

部 門	項 目	方 法	観 測 回 数	担 当 者
地理, 地形 (研)	南極大陸内の表面形態と地図作成	高度計	5 km毎	藤 原
雪 氷 (研)	大陸氷厚の測定	人工地震法による	50~100km毎	江 頭
	〃	アイスレグダによる	走行中毎時	〃
	積雪量測定	雪 尺	50km毎	遠 藤
	積雪量および雪氷の経時変化	10mのコアサンプリング	100km毎	〃
重 力 (研)	積雪層構造, 雪質, 密度の測定	雪穴による断面観測	100km毎	〃
	雪氷表面の観察	クレバス, スカブラ等	随 時	〃
	重力測定	ラコステ重力計	10km毎	柿 沼
地 磁 気 (研)	地磁気観測	マグネットメーターによる絶対測定	25km毎	柿 沼
	V L Fの緯度効果	V L F観測装置	毎 時	〃
測 地 (研)	位置, 方位決定(航法)	天測, サンコンパス	100km毎, サンコンパスは随時	柿沼, 藤原
気 象 (定)	地上気象観測通報	シノプティック観測	3ないし6時間毎	小林, 西部
医 学 (研)	人体の寒冷馴化	体温, 体重, 皮下脂肪, 血液等の測定	随 時	小 林

## 3. 船上観測

部 門	項 目	方 法	観 測 期 間	担 当
海 洋 (定)	海流測定	GEK による	1 日 2 回全航程	渡 辺, 日向野
	水温観測	BT による	1 日 2 ～ 3 回全航程	〃
	表面水の採取および 测温	採水バケツ, 温度計	1 日 2 ～ 3 回全航程	〃
	各層観測	ナンゼン採水器	フリーマントル～南 極洋～ケーブタウン	〃
	海水の化学分析	表面水および深層	全航程	〃
	海底堆積物の採取	採泥器による	南極大陸周辺大陸棚	〃
生 物 (研)	南極洋における物質 代謝	各層採水による	南極洋	富 永
	植物プランクトンの 生態学的研究	〃	〃	〃
	植物胞子花粉の散布 状況調査	空気サンプリング	全航程	柏 谷
	プランクトン海藻の 採集	プランクトンネット, 採泥器	南極洋	福 井
地 球 物 理 (研)	海上重力測定	海上重力計	全航程	長 沢
	海上地磁気観測	プロトン磁力計	全航程	〃
電 離 層 (研)	V L F, 中短波電界 強度測定	電界強度観測装置	全航程	石沢, 夏隊員(復)
電 波 科 学 (研)	空電スペクトル観測	スペクトル観測装置	全航程	田中, 夏隊員(復)
気 象 (研)	海塩核濃度の測定	空気吸引法	往 航	菊 地
宇 宙 線 (研)	緯度効果観測	中性子計	全航程	須田, 夏隊員(復)

## 1. 3. 経 費

第 9 次南極地域観測事業費は総額7億7,697万円である。内訳は

観測部門経費	156,192千円
設営部門経費	182,557
隊員経費	56,819
海上輸送経費	365,549
訓練経費	2,528
本部経費	13,326

計 776,971千円

観測部門および設営部門内訳は次の通りである。



表3 観測関係経費予算額表

部 門	科 博 関 係 分	各 省 庁 関 係 分
	千円	
極 光・夜 光	9,463	
地 磁 気	11,933	
電 波	3,555	
電 離 層	680	千円 20,565 (電波研)
宇 宙 線	14,450	
気 象	3,950	31,802 (気象庁)
生 物	8,062	
医 学	916	
海 洋	3,370	2,095 (水路部)
地 震	(ライトバレーを含む) 2,360	(潮汐を含む) 6,260 (地理院)
雪 氷	4,035	(重力を含む)
地 理	2,420	1,110 (地理院)
地 質	2,925	(ロケット 19,000千円東大)
共 通	2,368	

表4 設営関係経費予算額表

部 門	予 算	備 考
	千円	
機 械	114,016	雪上車3, そり, 電気関係, 暖房関係
燃 料	10,180	軽油, ガソリン等
建 築	19,140	居住棟, 作業棟, 通路等
土 木	1,183	ミキサー, 諸材料
通 信	8,680	車載用通信機, 保守用品等
医 療	1,350	監視装置, 薬剤
装 備	14,967	防寒衣類, 行動用品, 文房具等
食 糧	2,387	基地予備食
共 通	10,654	梱包, 輸送, 倉庫料等

他に開発研究費でアイスレーダー (2,120千円), カブース (1,033千円) を製作した。

## 2. 行動計画と経過の概要

### 2.1. 計 画

「ふじ」の行動日程については本部総会での決定に基づき、防衛庁が次のような具体案を立てた。

1967年11月25日	東京港発
12月10日	フリーマントル着
16日	フリーマントル発
23日	南緯55度通過
30日	氷縁着（エンダービーランド沖）
1968年1月初め	昭和基地へ空輸作業および建設作業，オラフ海岸沖，エンダービーランド沖調査行動
2月21日	氷縁発
24日	南緯55度通過
3月1日	ケープタウン着
3月7日	ケープタウン発
23日	コロンボ着
27日	コロンボ発
4月12日	東京着

総行動日数は140日と決定された。実際は、暴風圏の低気圧を避けるために予定より1日早く12月15日にフリーマントルを出港，追風を受けて南にコースをとったためもあるが、南緯55度は予定より2日早く通過した。このため、帰航の南緯55度通過も2日早かったが，ケープタウン入港以後の日程については予定通りであった。

9月1日に隊，艦，本部のオペレーションについての合同連絡会（いわゆる三者連絡会）において次の事項が了解されていた。

1) 大型雪上車3台の揚陸地点については，オングル海峡の氷状悪化も予想され，基地側に揚陸されれば，以後の内陸調査旅行が非常に不利になるおそれがあるため，直接大陸沿岸に揚陸を希望する。

2) 基地周辺行動中に第9次隊および第8次越冬隊により生物，地学，地球化学，雪氷，地磁気等の野外調査を行なうためヘリコプターの支援を希望する。また内陸調査旅行用の燃

表5 第9次観測隊作業計画 (● 新規輸送, ○ 基地既存)

部門	作業資材	期 日	X	5	10	15	20	25	30	35	III
土木	土木資材										
建築	居住棟 発電棟 通路 内部改装 予熱室 便所 極光カメラ室 検査室 資材 (5t)										
機械	45KVAエンジン交換 65KVA発電機 20KVA移動 暖房機 電気工事 主制御 冷凍機整備 20KLタンク その他										
車両	KD-604 " 605 " 606 SM-10 " 15 ソリ (金) × 6 " (木) × 3 カブー トレーラ 予備品	} 好機を見て大陸揚陸 } 氷状により自走揚陸  ○ (0.7) ● (ランクル修理)									
燃料	軽油 (バルク 115KL) " (S 175D) " (W 390D) ガソリン (30D) 灯油 (21D) 雑油 (112%)	} 適宜分割輸送 (Iに160t)  ○ (100t)      ○ (30) (150D大陸揚陸と旅行隊収容)									
通信	アンテナ 補修資材	● (1KWSB修理)      アンテナ      送電線									
食糧	基地食 予備食	(31t)      冷凍品 (6t)									
装備		(0.4t)      (8t)									
公用		○ (1t)									
観測	Aグループ Gグループ 気電 離象 層学	} (18.7t)      (28.4t) 観測器械整備, 中継等									
野外調査		(自然保護地域の空撮) (潜水調査)      ○ ヘリによる野外調査									

料30 t を雪上車揚陸地点沿岸から約10km 内陸に空輸を希望する。

3) 船をとめて行なう海洋観測 (いわゆる定点観測) は往航時は困難であるが, 帰航時にできるだけ時間的余裕を見て実施する。

一方積荷についても再三打合せ会が持たれ最終的には表6 に示すものとなった。

表 6 第 9 次観測隊積荷総括表（輸送実績）

部 門	燃 料	機 械	建 築	土 木	医 療	食 糧	装 備	通 信	観 測	公用品	合 計
重 量 (t)	233.1	83.9	76.8	10.0	0.7	43.7	8.3	2.5	48.8	1.0	508.8

発電機の増設のため燃料のしめる割合が多くなったことと、内陸調査旅行に備えて機械車両関係の積荷が多くなっていることが今回の特色であろう。

実際の積荷の段階で各部門共積荷重量の超過があり、予定量を大分上まわったので、これの調整に苦心した。結局建築部門の作業棟、造水槽等を積み残さざるを得なかった、積荷の場所については、大型雪上車 3 台が 2 番ハッチの上部に収容されたが、下のハッチに建築資材が積み込まれ、基地における荷おろし、作業手順を考えると必ずしも理想的な積荷の状態ではなかったが、やむを得ないことである。

基地への輸送については、基地建設の手順、越冬人数、重点業務を考慮し、次の基本的な方針を立てた。

- 1) 輸送を 3 段階に分け、輸送物資の優先順位をつける。
  - 2) 第 1 段階 200 t、第 2 段階 100 t、計 300 t の物資で 28 名越冬可能とする。その場合、居住棟だけは新設し、他の施設は現状（第 8 次越冬隊の状態）維持、消耗品の補充のみにとどめる。
  - 3) 残余の物資は基地施設と観測内容の充実、拡張のためとし、これらは第 3 段階とする。
- 以上の基本方針により基地建設の計画細目が立案された。これを表 5 に示す。

## 2.2. 往 航

1967 年 11 月 25 日 14 : 00 盛大な見送りを受けて出港。直ちにオペレーション会議、全員連絡会がもたれ、今後の行動予定、艦内生活の注意事項等を連絡した後、装備品の支給を行なった。一方船上観測のうち重力、地磁気、宇宙線、電波科学の電界強度測定は直ちに観測開始、翌 26 日からはこれに海洋、生物観測も加わった。「ふじ」は比較的静かな航海を続け、予定のコースを南下、この間消火訓練、救命胴衣着脱訓練、総員離艦訓練等を行ないながら次第に艦上生活になじんで行った。11 月 30 日レイテ島沖にて慰霊祭、12 月 2 日セレベス海に入り、翌 3 日 12 : 10 赤道通過南半球に入る。12 月 5 日朝ロンボク水道を通過、インド洋に入った。この日から 3 日間にわたって南極大学が開講、南極についての一般的な教養講座がもたれた。この間荷役についての隊・艦合同オペレーション会議があり、フリーマントル入港前にすでに

具体的な作戦が立てられていた。12月10日11:00フリーマントル入港、補給と休養の後12月15日10:00同港を出港した。入港中の気象解析から暴風圏を東進する低気圧の動きに注目、低気圧の前面を追風で一気に南下することが有利であると判断し、予定より1日早く出港が決定されたのである。寄港中はパース日本総領事館初め在留邦人の非常な歓迎を受けた。また当地で米国オブザーバー、スポンホルツ氏が乗艦、ケープタウンまで同行することになった。

15日10:00フリーマントルを出港した「ふじ」は南西にコースをとり、翌16日夜半東経108度付近で南に変針、一気に南下をはかった。天気判断は極めて適切であり、船の動揺は少なく、終始追風で暴風圏を突破することができた。20日21時頃南緯54度半付近で初氷山を視認、21日00:30南緯55度を通過、翌22日東経104度付近で氷縁に接近、ここより氷縁沿いに西航を始めた。これより先、フリーマントル出港後から昭和基地と無線連絡を行ない、オビ号、およびマクマードからの氷状情報を得ることができた。オビ号よりのものは「バックアイス」の前縁は例年とあまり変りないが、バックアイスの内側に開水面ができていて可能性が強い、またマクマードよりは「氷海外縁部のバックアイスは多いが、内側はルーズである」と云うものであった。艦内においてはほとんど連日、作戦についての打合わせ、連絡が行なわれていた。

氷縁沿いに西航を始めた「ふじ」は氷山群を縫うようにして26日夜半エンダービー沖を通過、進路を南西にとり氷縁沿いにリュッオ・ホルム湾に接近して行った。先に入手したオビ号からの情報よりもバックアイスの前縁はかなり後退している。時間が経過していたため、または低気圧のため沿岸に圧縮されたのかも知れない。28日早朝、南緯67度、東経42度付近からバックアイスに進入開始、51号機により偵察飛行の結果、南西方に開水面(大利根水路)があることを認め、約40マイルにわたる氷量9~10のバックを切り、開水面に到達、更に開水面を南西進し28日12:00南緯68度07分、東経40度16分(基地より56マイル)で定着氷に接岸した。81号機のテスト飛行の後14:00定着氷進入地点を見るため西方の偵察飛行が行なわれ、西方に開水面のあることが認められた。

### 2.3. 輸送・建設

12月29日早朝から西方開水面に向け航進開始、氷量7~8。13:00氷状偵察を兼ね基地への連絡便が発艦、手紙、生鮮食品等をとどけ、初期打ち合わせを行ない、16:05帰艦した。「ふじ」は南西進を続け、23:35定着氷に接岸、ここを第一空輸地点とすることにした。68°26'S, 38°43'E, 基地からNNW約35マイルの地点である。

輸送は最初4便を初度輸送便とし、基地側の受入れ体制の確立、建設作業の準備等のため

の人員資材のみの輸送に限り、以後予定に従って本格的な空輸が行なわれることになっていた。第1便が13:00発艦、基地に向かい、以後4便までの飛行で初期必要物資4.9t、人員隊員12名、乗組員18名を輸送し、基地における受入れ体制と建設準備体制ができ上がった。翌31日も午後各4便の空輸が行なわれ、約半数の隊員は基地に飛び建設作業に従事した。1968年元旦、形ばかりの新年行事の後、基地では新居住棟の基礎工事が進められていた。4日午前まで空輸は続き、約48tの物資が運ばれた。

この頃、大型雪上車の揚陸場所とその時期が当座のオペレーションの焦点となり艦長、隊長はヘリで昭和基地対岸のモレーン地帯を偵察、適当なベイアイスに接舷して雪上車をおろす計画が立てられた。付近一帯の水深はすでに第8次隊の手で詳細に調査されており、接岸には適当な場所である。問題はその時期である。「ふじ」の現在地点より昭和基地まで約40マイルの定着氷は厚さ平均170cm、その上に約10cmの新積雪があり、表面にはパドルの発生はなく強固なものであり、一方揚陸予定地付近のオングル海峡の海氷は連日の晴天のため急速に薄くなりつつあり、揚陸を予定していたベイアイスはいつ流失するか予断を許さない状態であった。定着氷を割るにはもう少し時期を遅らせた方が有利であったが、揚陸場所のベイアイスの状況から、定着氷を強行突破し、早い時期に雪上車の陸揚げを行なう作戦がとられた。

1月4日開水面を東に移動、68°25'S、38°53'Eの地点より定着氷に進入開始、ほぼ南北に走る氷山列の西側に添って砕氷南下を始めた。定着氷は堅く、連続チャージングを繰返し、特に氷山列の風下側の吹きだまりを突破するには非常に時間がかかった。特に6日から10日にかけては最悪の状態、軽雪上車SM10を氷上におろし、氷厚測定、ルート偵察を行ない、また爆破作業をやりながらチャージングを続けた。

1月12日朝「ふじ」はオングル島南方をう回し、オングル海峡に入り、9時に大陸沿岸モレーン地帯の揚陸地点に接岸した。午後そりとカブースを揚陸、夜間に大型雪上車3台の揚陸を無事終了した。

「ふじ」は翌13日11:00オングル島に回航接岸、ここに輸送と基地建設の新しい段階を迎えることになる。

この間基地においては初期の輸送段階で約半数の隊員が基地に移り基地建設に従事していた。第8次越冬隊は隊長以下の内陸調査旅行隊がまだ帰還せず、人手不足であったが、基地の定常業務の維持、輸送物資の荷受け、荷さばきを担当してもらい、第9次隊は建設作業に専念できた。勿論「ふじ」乗組員からは輸送、建設、通信、補給等全般にわたって強力な支援を受けた。基地建設作業本部を管制棟におき、毎日16時から各部門責任者が会議を開き、本

表7 基地建設作業一覧表

部門	作業内容	Dec.												Jan.																		Feb.											
		30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6			
建築 土木	新 居 住 棟																																										
	同上 基礎工事																																										
	新 発 電 棟																																										
	同上 基礎工事																																										
	通路関係工事																																										
	冷凍庫前室																																										
	各倉庫移転																																										
水源地ダム補修																																											
機械	車 両 整 備																																										
	冷凍機整備																																										
	配管工事																																										
	配線工事																																										
	バルク燃料関係																																										
	物品整理																																										
	火災報知機																																										
	発電機関係																																										
暖房機関係																																											
通信	定常業務応援																																										
	アンテナ関係																																										
装備	送受信機整備																																										
	装 備 品 整 備																																										
観測	生 物 物 資																																										
	基地観測各部門 機器装置申継																																										
作業 人員	第 8 次越冬隊 (基地業務関係を除く)			9	11	6	8	8	8	8	8	8	8	8	3	3	3	8	8	11	11	10	11	11	13	14	14	14	14	14	14	4	4	4	2	2	0	0	0	0			
	第 9 次 隊			10	10	10	17	17	21	15	12	15	15	15	16	15	15	10	27	30	29	19	21	20	26	20	37	36	36	36	36	36	36	27	27	27	25	25	32	32	32	32	
	ふ じ 乗 組 員 (基地の輸送要員を含む)			13	13	13	14	14	14	14	13	13	13	13	9	9	9	0	29	28	33	18	46	48	56	48	36	39	35	35	40	25	0	0	0	0	0	0	0	0	0		

日の作業経過、明日の作業予定、作業人員の割当て、配車、その他の連絡を行ない、輸送建設作業の円滑を期した。作業開始は08:00、終了は21:00とし、宿泊は飯場棟および管制棟を使用した。

12月31日空輸開始と同時に、基地では建築、機械、通信各部門の建設整備が開始された。詳細については表7を参照されたい。

建築関係では新居住棟の基礎工事は1月5日に完了したが、建物材料が積荷の関係で輸送できず（大型雪上車が上部ハッチに積んであるため）、「ふじ」が接岸後でなければ材料入手ができないので、作業の主力を新発電棟の基礎工事に向けた。新発電棟は当初倉庫として準備したもので、従来のパネル方式のものではなく、基礎コンクリートの上に軽量鋼で柱、梁を溶接工作をするものであり、製品としてではなく材料として輸送したもので、工事には非常に手間のかかるものである。当初床面積12m×14mのものを予定していたが、現地の地取り、材料を検討した結果、14m×18mのものが建設可能の見通しがつき、ただちに工事が始められた。基礎の地ならし、根切りの作業は凍土と岩盤、それに雪解け水の地下浸透のため非常に難工事となり、掘さくは斜面下側では2m以上にも達し、コンクリート用の骨材採取量も膨大なものとなった。13日「ふじ」をオングル島に迎えてもまだ基礎コンクリート打ちが続けられていた。

「ふじ」接岸で新段階を迎え、基地に宿泊していた作業員は艦から通勤することとし、新しい編成で作業分担をきめた。輸送も空輸と並行して建築資材の長尺物等はそりで氷上輸送を行なうこととした。艦側からの支援人員も増加され、更に強力なものになり、好天にも恵まれ輸送と建設は急ピッチで進んだ。

この頃プラトー基地より昭和基地帰投を急いでいた鳥居調査旅行隊は、F16（基地より96°, 12マイル）に到着しており、クレバス地帯のため前進をやめ、ヘリコプターによる収容を待っていた。15日3便をもって鳥居旅行隊の人員および観測資料等は基地に収容。

新居住棟の作業は順調に進み、17日パネル組立てを始め、夜間作業で翌朝には完成した。

18日には鳥居隊がF59地点に故障のため残置した雪上車（KD601）の修理収容のための隊と、燃料デポ荷受隊がF16地点までヘリで行き、引続き約30tのドラムかん入り燃料が同地点まで輸送されデポされた。一方故障雪上車の修理収容も首尾よく終り、21日朝全員無事に帰艦した。

基地輸送は、その後ヘリコプターのエンジン故障などがあったが、そりによる氷上輸送と並行して1月23日すべての物資輸送が完了した（表8参照）。



表8 部門別輸送一覧表 (kg)

部門 年月日	燃 料	機 械	建 築	土 木	医 療	食 糧	装 備	通 信	公 用	観 測	会 計	摘 要
42. 12. 30		322							195	302	819	
12. 31		2, 058	1, 799	7, 890		1, 176	198	61	40		13, 222	
1. 2		2, 186			23	8, 287	657	404	192	2, 409	14, 158	
1. 3		7, 245	110	1, 650		1, 491	584	471		1, 634	13, 185	
1. 4		280				4, 626	120			130	5, 156	
1. 6		128				376				1, 483	1, 987	
1. 12		33, 278									33, 278	大陸揚陸
1. 13			36, 684								39, 684	氷上輸送 (鉄材)
1. 14		1, 450									1, 450	氷上輸送 (トレーラー)
1. 15	20, 000										20, 000	
1. 16	16, 788	15, 043	4, 655 26, 392				300	202		4, 396	4, 655 63, 121	パネル
1. 17	51, 488	3, 395 5, 643	3, 700				389	113		7, 654	3, 395 68, 987	
1. 18	30, 600										30, 600	大陸へ空輸
1. 19	24, 924	110 7, 140	60		567		1, 789	246	600	353 17, 322	523 51, 988	
1. 20	10, 409	3, 118	3, 376	450		6, 732	3, 662	963		5, 415	24, 316 10, 408	
1. 21	7, 000 31, 920	1, 289				19, 020				5, 543	32, 852 31, 920	
1. 22	68, 778	1, 200									1, 200 68, 778	
1. 23	△28, 812				90	1, 941	599			2, 170	4, 800 28, 812	
計	雪	7, 000	43, 840	44, 775	450	90	27, 693	4, 261	963	600	13, 481	143, 153
	空	226, 094	40, 045	32, 001	9, 540	590	15, 956	4, 037	1, 497	427	85, 330	365, 517
合 計		233, 094	83, 885	76, 776	9, 990	680	43, 649	8, 298	2, 460	1, 027	48, 811	508, 670

(註) 上段は雪上車輸送, 下段はヘリコプター輸送

建設の方は主力を新発電棟に、一部を通路の改造に向けたが、材料加工の手間の多いこと、溶接機と熟練者の不足などから遅々として進まず、全員ようやく疲労と焦燥の色が濃くなって来た。それでも21日にはヘリコプターのつりさげによって65KVA 発電機のすえつけが終り、壁、屋根と次第に形を整えて行った。

1月22日より観測関係者は8次隊からの業務申継ぎ、観測装置の設置、調整に入り、一部は定常観測の実習を開始した。

「ふじ」の今後の行動予定について艦長、隊長間で次のように打合わされていた。即ち、1月28日に実質的には越冬隊の交代を行ない、8次隊全員を艦に収容、9次隊の調査要員を乗せて29日一旦基地を離岸、南方海域（リュツォ・ホルム湾内）に向かい、ラングホブデ地区、スカーレン地区の調査、潜水による生物調査を行なった後、2月2日再び昭和基地付近に帰り、2月3日離岸、北方海域に氷海を離脱、氷縁を東航してマラジョージナヤ基地訪問の後、西航しながらプリンスオラフ海岸の露岩地域を調査、2月10日基地北方海域からヘリコプターを飛ばし、第9次越冬隊成立の儀式を行なった後、建設応援のため基地に残っている夏隊員全員を収容、帰途につくと言うものである。

1月28日09:00、第8次越冬隊は基地を、第9次越冬隊は艦を、それぞれ雪上車とそりに分乗、同時に出発、途中の氷上で行きかい、ここに実質的な越冬隊交代が行なわれた。

翌29日はブリザードで出港延期、1月30日朝南方海域に向け出港、ラングホブデ付近からスカーレン調査班、空中磁気測量班を乗せて81号機発艦、一方ラングホブデ調査班およびサポート隊は内火艇で上陸、それぞれ調査地域に向かった。翌31日「ふじ」は更に南下をしてホノール氷河前面まで進入、初の航跡を印し、測深儀により興味ある海底地形の調査が行なわれた。

2月1日ラングホブデふじ入江付近で潜水調査場所の偵察、自然保護地域の空中撮影、スカーレン調査隊の収容があり、翌2日、艦側の強力な支援のもとに福井、大久保両隊員が潜水し、海底生物の採集、水中写真撮影を行なった後、「ふじ」は再び昭和基地に帰った。

2月3日16:00小雪降る中を越冬隊員に見送られて離岸、進入時のコースをチャージングしながら定着氷を北上、6日17:00定着氷を離脱、バックアイス域を切り、同日22時外洋に脱出、直ちに東航を開始した。

2月8日ソ連マラジョージナ基地沖からヘリコプターで同基地を訪門、隊側からは第9次夏隊から4名、第8次越冬隊から12名が参加した。基地ではコルニコフ隊長以下多数の歓迎を受け、基地施設の見学、観測各部門の情報交換を行ない、短時間ではあったが有意義な機会を持つことができた。

翌9日西航して日の出岬に接近、ヘリコプターで日の出岬とあけぼの岩に二つの調査班を送り、生物、地球化学、地学の調査を行ない、隊員を収容後西航して基地の北東約50マイルの地点で明日の越冬隊成立儀式、夏隊の残留者収容などについて打合わせを行っていた。21:30基地との定時無線連絡で福島隊員の遺体発見の報を受け、直ちにその収容、処理の方針を協議、艦長以下各幹部の御協力を願い、深更まで諸準備がなされた。翌2月10日08:00艦発で発見現場に飛んだ。

2月11日10時から昭和基地食堂において第8次越冬隊長、艦長、第9次副隊長列席のもとに第9次越冬隊成立の式典がなごやかに行なわれ10:20基地発、11:00「ふじ」に帰った。遺骨は同便で「ふじ」に移され、隊員寝室の一室に安置された。しばらく続いた好天も最終便が帰艦すると間もなく雪が降り出し、好天期も終りをつげた。

以後「ふじ」は海洋観測をやりながら氷縁を西進して2月17日サナエ基地に接近したが、強風と降雪で視界なく、レーダーで棚氷を認めただけで訪門を断念、同夜半北上を開始した。

#### 2.4. 夏季野外調査

ヘリコプターを利用して行なう夏季野外調査の計画は、第8次越冬隊の希望も含めて出発前に艦側に要望しておいた。輸送作業の終了後、野外調査が実施されたが、その詳細については各担当者の報告によることとし、ここではその概略を述べる。

1) スカーレン地区調査(1月30日～2月1日):生物、地球化学、地学の調査。参加者7名。これの送迎便で白瀬氷河まで飛行コースを延し、空中磁気測量(参加者2名)を行なった。

2) ラングホブデ地区調査(1月30日～2月2日):「ふじ」がラングホブデ地区北岬付近に進出、内火艇で上陸、生物、地学、雪氷の調査、参加者10名。

3) 潜水調査(2月2日):「ふじ」がラングホブデ付近に進出、入江で潜水調査実施、大久保、福井両隊員が潜水。

4) 自然保護地域空中写真撮影(2月1日):「ふじ」がラングホブデ付近に停泊中、ベル機に隊員1名同乗、付近の撮影を行なった。

5) 日の出岬、あけぼの岩調査(2月9日):生物、地学、地球化学の調査。参加者日の出岬班6名、おけぼの岩班6名。

その他輸送建設期間中に東西オングル島内、オングルカルベン島、基地対岸モレーン地区の調査が行なわれた。

1月31日には定着氷が脆弱化したのを利用して「ふじ」は湾内を南下、スカルブスネス地区に接近、ホノール氷河前面に進出、水深の連続測定、海底生物の採集を行なった。

以上の諸調査は第8次越冬隊と共同で行なわれたが、出発前に同隊の希望する調査計画を承知していたので、特にヘリコプターの運行については能率的な計画を立てることができた。

#### 2.5. 福島隊員の遺体発見

1960年10月10日激しいブリザードの中に行方不明となった、当時第4次越冬隊員であった

福島紳隊員の消息は、その後のたび重なる搜索にもかかわらず、依然として不明であったが、本年1968年2月9日、西オングル島において第9次隊々員によって実に7年余の年月を経て発見された。本件に関する詳細な報告書は第8次越冬隊長（旧第4次越冬隊長）の鳥居鉄也氏より出される予定であるので、本項ではその経過を述べるにとどめたい。

発見の日2月9日は「ふじ」はすでに事実上交代を終った第8次越冬隊全員と第9次夏隊の大部分を乗せて、マラジョージナヤ（ソ連）基地訪問、プリンスオラフ海岸の調査を終り、明10日に予定されていた新越冬隊成立の式典準備と建設応援のため基地に残留している夏隊員4名を収容するため、最終飛行便を飛ばす計画をもって基地北東方約50マイルの氷海中にあった。

一方基地ではまだ建設作業が続行されていたが、矢内隊員の希望により、矢内、村越、大久保、福井、石川の各隊員が西オングル島の地質調査に出かけ、西海岸で矢内が福島隊員の遺体を発見した。現場は基地から直線で約4kmの距離にあるまめ島対岸の33m高地の西側

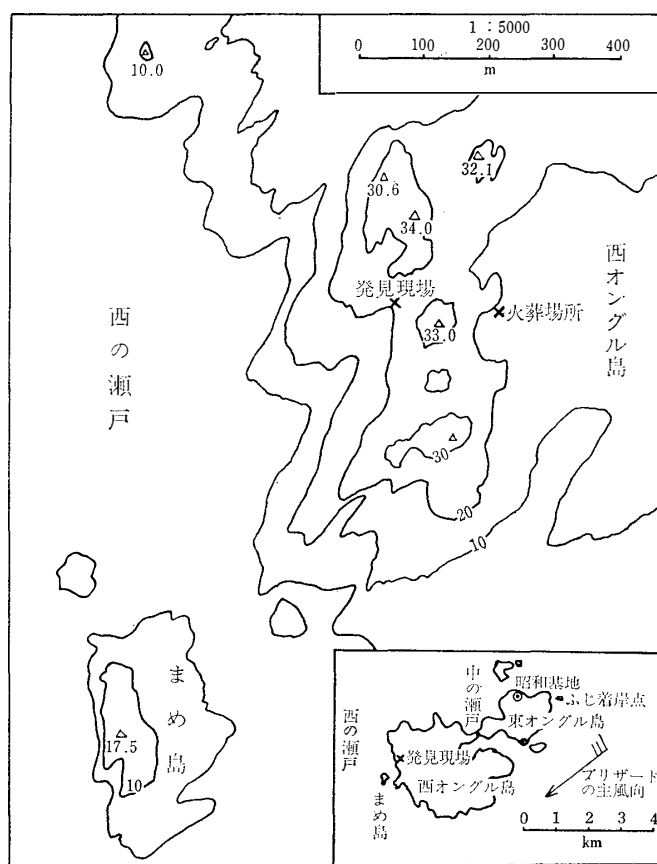


図1 福島隊員遺体発見現場

海岸で、眼下にまめ島を見下ろし、西の瀬戸をへだててオングルカルベン島が見られる場所である(図1)。一行は現場を保存し、基地に引き返し、村山隊長に報告、「ふじ」および南極本部に連絡を取った。

翌2月10日、鳥居、大瀬、石田、吉田、松田、広瀬(以上8次隊)、村山、清野、村越、土屋、柿沼、小林、大久保(以上9次隊)の13名が遺体の収容に当たった。遺体は鳥居隊長の立合いで、小林、広瀬両隊員によって検案された後火葬にされ、基地に帰った。翌11日福島ケルンに分骨納骨され、納骨式の後、遺骨は最終便で基地を出発した。

## 2.6. 復 航

2月17日悪天候のためサナエ基地訪問を断念した「ふじ」は、同夜半北上を開始、18日朝海洋観測を行なった後氷縁を離脱、帰途についた。ケープタウンまで北上する間、海洋の停船観測(いわゆる定点観測)は緯度3度ごとに実施しながら北上を続けたが、南緯54度付近から荒天となり、以後しばらく観測できないまま北上した。南緯55度線は2月22日早朝通過、ブーベ島に接近、海上から観察した。同島は本年10月頃より南アフリカ共和国によって観測所が設置される予定と聞いている。2月29日13:00ケープタウン港外着、3月1日予定通りケープタウン港に入港した。当地では領事館、在留邦人の歓迎を受け、3月5日には南アCSIR主催の日本、南ア、ベルギー三カ国の南極観測関係者による討論会があり、各隊の活動状況、観測結果の説明があった。

第8次越冬隊全員24名は福島隊員の遺骨を守って当地で退艦、オブザバーのスポンホルツ氏、報道の加藤、寺田両氏も退艦、それぞれ空路帰国した。

3月7日出港、コロンボに向かったが、所定の船上観測(海洋、生物、重力)はそのまま継続、更に越冬隊の実施していた宇宙線、電界強度測定は引き続き夏隊が分担、東京入港まで続けられた。また、ケープタウンの海洋気象台クロフォード氏よりWMOの水溫観測法研究計画の一つとして同氏開発の温度計により比較観測を依頼されたので、「ふじ」気象室の応援を得て渡辺、清野がこれを実施した。

## 3. 所 感

第9次観測隊夏隊の行動は天候にめぐまれたこともあって、隊・艦協力して船上観測、野外調査、輸送建設作業等全般にわたって所期の目的を達したと考える。しかし、将来のため検討改善を要する点もあるのでこれらについて述べたい。

### 3.1. 観測関係

#### 3.1.1. 夏季野外調査

ヘリコプターを利用して行なう野外調査は昨年に引き続き本年も実施され、将来ますますさかんになることが予想されるが、これのあり方について考えてみたい。たとえばラングホブデ地区などは過去の各観測隊が毎年調査班を送って調査を続けており、各専門の分野としてはそれぞれ成果を得ているが、これを総合的に見れば、まだ欠ける所があると思われる。従って、今後の行き方として、各年次毎に調査目標地域をしぼり、各分野の専門家で調査隊を編成し、集中的に総合的な調査を行なうことが最も能率的であり、成果もあがることと思う。航空機の支援もこの方法によれば、更に能率的な強力なものが得られるだろう。

#### 3.1.2. 船上観測

船上観測、特に船を止めて行なう観測については、今年は事前に良く打合せがしてあったので問題はなかったが、輸送任務を第一使命とする「ふじ」においては特に往航にはあまり多くを期待しない方がよい。状況に応じ変えることができる柔軟な観測計画であることが望ましい。

### 3.2. 輸 送

1) 荷物の重量の表示は常に正確でなければならない。特に物資の大部分を航空機によって輸送している以上、重量表示の不正確は直接大事故につながるものであり、ひいては隊全体のオペレーションを左右するものとなる。残念ながらこれらの例が見られた。

積荷リスト作成はかなり早い時期に要求されるもので、未完成、未入手の物品、または未梱包のものについては「見込み重量」を記入する例があり、これ等の見込み違いが原因かと思われるが、各部門担当者はできる限り正確な重量を把握するよう努力すると共に、積荷前の検数協会検尺の際、容量だけでなく重量も正確に測る必要がある。

2) 基地接岸後の輸送についてはヘリコプターによる輸送と並行し、建築資材等長尺物は雪上車より氷上輸送をしたが、能率はあまり良くないが、この方法も一考さるべきである。長尺物、重量物等で当年必ずしも基地に運ばなくてもよいもの（氷状により接岸不能の時を考えて、たとえば長期計画による建築物の一部、土木機械等）は当初より氷上輸送を考えても良いだろう。しかし、基地側の揚陸地点にも若干の工作が必要となる。

3) 発電機、車両等に使用する燃料の量は全輸送量のほぼ半分を占めるようになった。これでも年間使用量を考えるとほとんど余裕がない状態である。何かの事故で燃料が失なわれ

た時のことを考えると寒心に耐えない。早急に燃料の備蓄が必要である。このためには、「ふじ」接岸点付近にタンクを設置し、艦よりパイプラインで直接タンクに燃料を送り込む方法が最も良いと考えられ、タンクの設置場所、パイプラインの長さ等について現地について一案を得ている。

### 3.3. 設営関係

新発電棟は当初倉庫材料として軽量鉄骨、鉄板、セメント等を購入し、現地において地取り、将来の利用価値等を考慮に入れて諸材料の許す限り大きいものを建設した。このため現地加工の部分が多く、また基礎工事もコンクリートを100t以上も使用するような本格的な大工事となり、建設作業の大部分の勢力をこれに集中せざるを得なかった。この経験から、基地の建築物は現地加工の少ない、基礎工事も簡単な、組立式の従来からの方式を踏襲すべきである。また出発前必ず全隊員で組立訓練を行ない、理解を深めておく必要がある。最近ややもするとこのことが軽視されつつあるのは遺憾である。

ロケット観測所建設については更に強力なブルドーザー、ショベル等土木機械が望まれる。

終りに、本行動期間中終始強力な御支援を頂いた本多艦長、松島副長以下「ふじ」乗組員に対し衷心より感謝の意を表します。

第8次越冬隊鳥居隊長以下皆様の御協力御指導に対し感謝いたします。

また各寄港地では現地公館の御配慮、在留邦人の盛大な歓迎について厚く御礼申し上げます。

(1968年6月13日受理)